「野」とは、京都の歴史において、どの様な価値観であったか？
人々が、何かを成す時、その場所として 「野」はどの様な時に選択されたか？

「野」と、日本史、京都の歴史 との 関係 を探りました。

まず、山代・山背の時代を経て 山城となった当時、どの様な状態であったか？
「葛野」の地域、また、多くの「野」を抽出。 また、「郡」の範囲を特定し、
どの「郡」に、各「野」が所在するか、また集落の参考に当時の社寺をまとめた。

ご存知の通り、「葛野」の名は、「日本書紀」応神天皇が
「宇遅野」から詠まれた歌として、山代でも最古の地域名として登場する。
『 千葉の 葛野を見れば 百千たる 家庭も見ゆ 国の秀も見ゆ 』
当時の「葛野」は、図の「郡」地域より、東南方面に拡大された地域とされる。

図は、、その後701年（大宝1年）成立の大宝律令（散逸）で定められた
「郡」地域を明らかにするため、延暦16年（797年）「続日本紀」に記載された、
各「郡」での社寺の所在記事をなどを元に、仮説したものです。

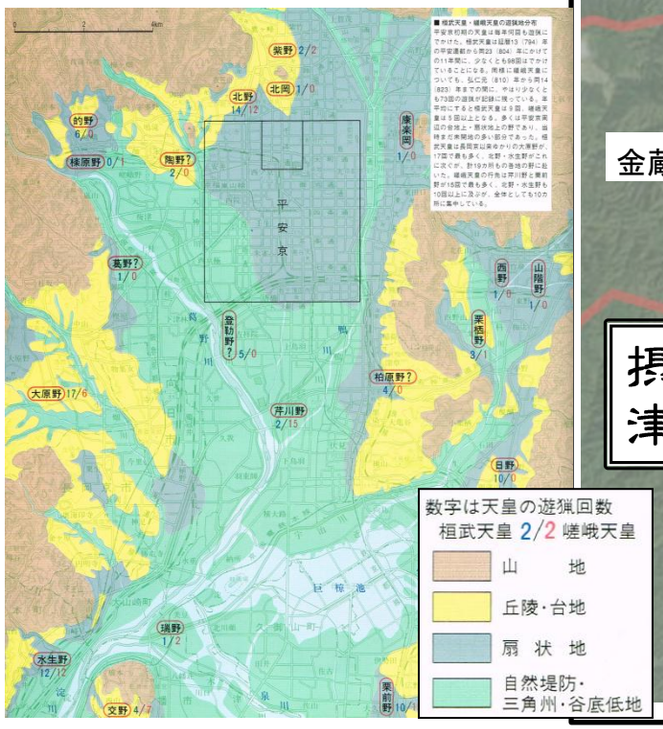
「葛野」と、「愛宕」は、平安京を境に、東西に二分されている。
「乙訓」「紀伊」とは、平安京の南端、山陰道が境となる。 しかし、郊外では
概ね山峰が、郡界・国境となっている。
「乙訓」と「紀伊」は桂川が、「紀伊」と「久世」は巨椋池が境界と判別した。
「宇治」は、大文字山・稲荷山 と 巨椋池・宇治川が境界と判る。

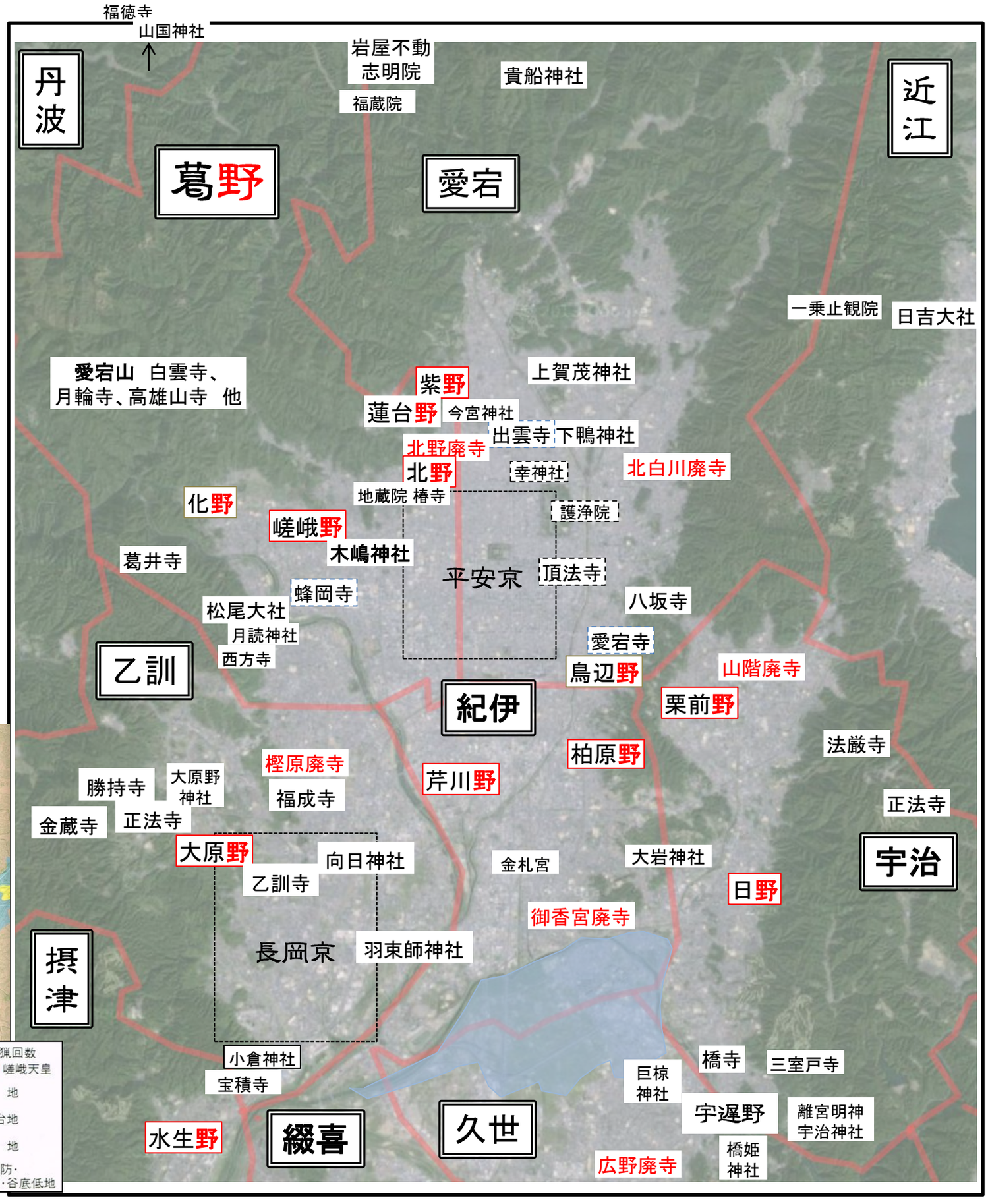
しかし、各「郡」は、中央集権制度の確立、租税徴収が主目的である。
居住、生産にとっては、地勢が影響する。
「郡」各々の、地勢は下図の通りで、「葛野」「乙訓」「紀伊」が三角州であるの
に対し、「愛宕」は、先史、河川からの砂礫が堆積した扇状地である。

平安京への遷都当初、この扇状地
や、さらに一段高い丘陵地が、「野」
として遊猟地に選ばれた。
高乾で稲作には適さない場所である。
他方、「葛野」は特に河川氾濫が多い
土地であった。

同じ、山代でも成立・地勢が違う
「葛野」と「愛宕」、人々の歴史との
関わりを辿る。

しかし我々は、「野」の前に、大和の
時代以前からの、山代の「山」の信仰
を、再確認する 必要がある。
「野」は多くが山麓であり、山代、山背、
山城と国名でも明らかな様に、この地
は、野よりさきに山に囲まれた地として
人々の歴史に登場する。





基本的確認　山代時代からの「山」信仰　神奈備　磐座 ～ 山岳修験道 ～ 神社創建

▲神奈備　磐座　▲役小角（修験道七高山）　▲泰澄　▲神社・寺
（平安京 当初までの一部）

平安京遷都以前の創建を調査（伝承含む）
その内、主たる社寺のみ掲載。　寺院は、赤カッコで表記

平安京 創始 以前

人々は居住拡大・移住しながら、磐座・山岳信仰、自然を神として信仰を深めた。
出雲～丹後～亀岡～大和、 越（北陸）～淡国（近江）、 瀬戸内～河内、各時代に生活、祭礼、埋葬など文化の足跡を残しながら、山代に至る。　600年頃には 仏教、観音信仰も加わり、神が宿る形容として神殿創設に影響。　そのあと、天智・天武から文武天皇期には日本国、日本人としての自覚、国防整備がなされた。
「山代」は、神々の憑代とした山を祀り、出雲の神、観音信仰で精神形成されていった。

桓武天皇平安京鎮護のため、四方の大将軍神社造営に加えて、怨霊対策のため魔界封じを徹底。
都の**東西南北の磐座** の下に『一切経（いっさいきょう）』経文を埋め込んだ。（ピンクの網掛け箇所）

賀茂川沿いに 幸神社（さいのかみのやしろ）、鬼門の上賀茂神社と下鴨神社を大改修。延暦寺へ続く。
裏鬼門にあたる南西は、城南宮・・・その先の石清水八幡宮。 北の守りに、貴船神社と鞍馬寺造営。都の入り口・羅城門両脇に東寺と西寺。今熊野に宝剣を埋め（剣神社）、愛宕山寺院の大改修。

都の鬼門の方角に、死に追いやった早良親王や井上内親王と、藤原氏の政権争いで奈良時代に不遇な日々を送った吉備真備や藤原広嗣を祀る・・上御霊神社と下御霊神社。

出雲大神宮（現 亀岡市）

創建年代　**社伝、**元明天皇期　**和銅2年（709年）社殿創建　大神朝臣狛麻呂　現社殿 1305年足利尊氏**
主祭神　大国主命（おおくにぬしのみこと）　別名を三穂津彦大神・御蔭大神とする。
三穂津姫命（みほつひめのみこと）　高産霊尊の子で、大国主の国譲りの際に大国主の后となったと伝えている。保津川名 由来伝承
配祀神　天津彦根命　天夷鳥命
摂社　崇神天皇など
＊ 祭神　天津彦根命・天夷鳥命・三穂津姫命の3柱の説、元々は三穂津姫尊1柱のみの説もある。

愛宕神社

本殿　**伊弉冉尊**（いざなみのみこと）　**国津神出雲系　創造母神**
稚産霊神　（わくむすびのかみ）　「穀物神」
埴山姫神（はにやまひめのみこと）　「創造神」天平瓮・祭器・道具・食器 の 源
天熊人命　（あめのくまひとのみこと）　「五穀神」
豊受姫命（とようけびめのみこと）　「穀物神」
若宮　雷神　（いかづちのかみ）　「雷」建御雷神
迦遇槌命　（かぐつちのみこと）　**「火の神」**　**伊邪那**　岡田鴨神社
破无神　（はむしのかみ）　「蛇神」？
奥宮　**大黒主命（大国主命）**　**国津神出雲系　創造・農業・愛縁神**

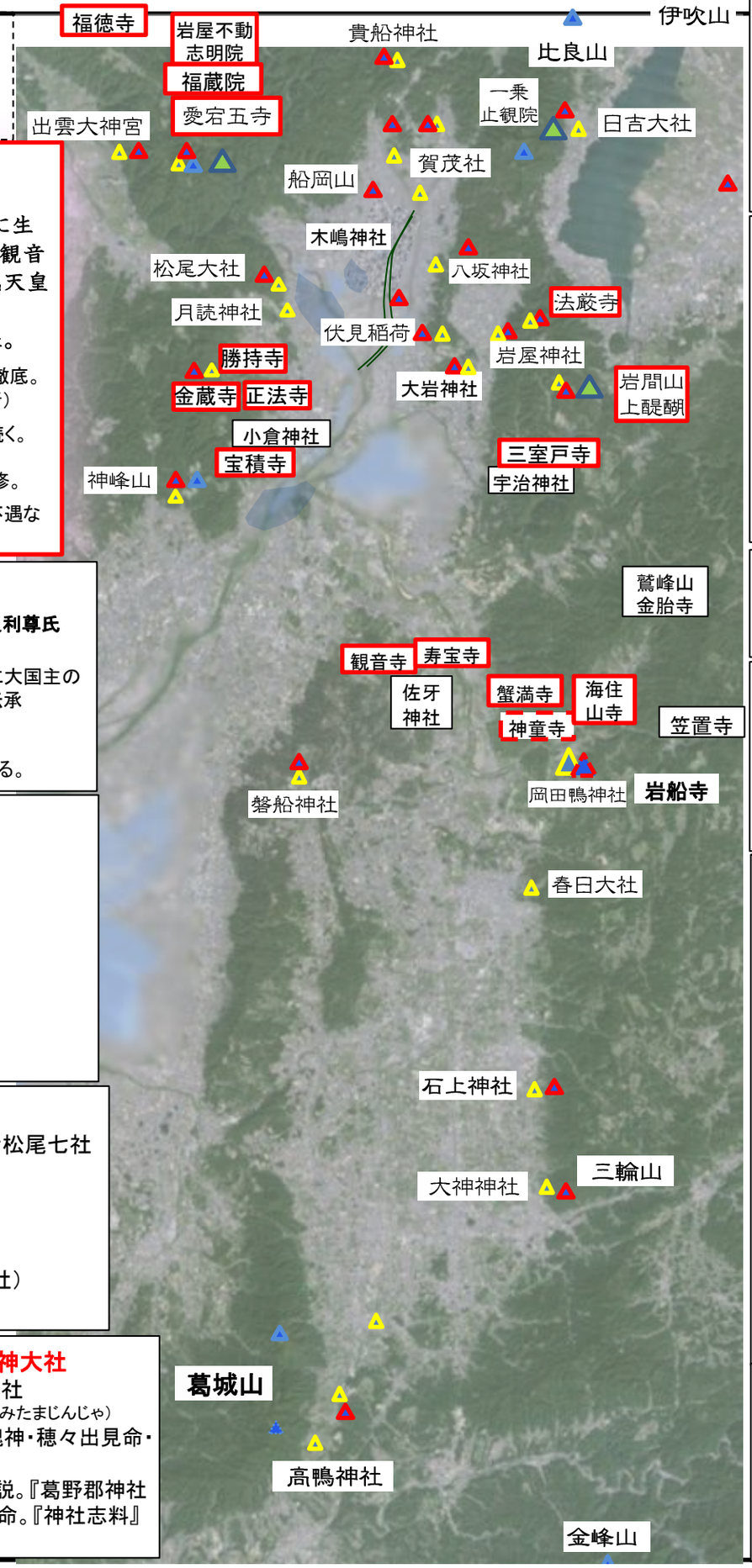
松尾大社　大宝元年（701年）　秦忌寸都理（はたのいみきとり）

主祭神　**大山咋神**　中津島姫命 － 市杵島姫命の別名、異説あり　本社合わせ松尾七社
境内末社　・松尾総神社　月読尊
・三宮社　玉依姫命、のちに大山祇神・酒解神を合祀して三宮社
・衣手社　玉依姫命　明治、羽山戸神 合祀
境外摂社　櫟谷宗像神社　2社合祀
（宗像社 祭神：**市杵島姫命**　櫟谷社（いちたに）奥津島姫命　式内社）
月読社　**祭神：　月読尊　式内社（名神大）**

参考　石清水八幡宮
創建　**貞観元年（859年）**　南都大安寺の僧 行教（空海の弟子）
中御前：誉田別命（ほんだわけのみこと）　第15代応神天皇の本名。
西御前：比咩大神（ひめおおかみ）　宗像三女神
多紀理毘売命（たぎりびめ）、市寸島姫命（いちきしまひめ）、
多岐津比売命（たぎつひめ）
東御前：息長帯姫命（おきながたらしひめのみこと）神功皇后の本名。
息長氏は、大和渡来朝鮮、古代近江国坂田郡（現米原市）が根拠地
以上の3神を総称して「八幡三所大神（八幡大神）」という。

木嶋神社　**名神大社**

木嶋坐天照御魂神社
（このしまにますあまてるみたまじんじゃ）
天御中主命・大国魂神・穂々出見命・鵜茅葺不合命
「天照御魂神」は諸説。『葛野郡神社明細帳』は、爾々芸命。『神社志料』では天火明命



日吉大社　起源社伝崇神7年　推定210年頃

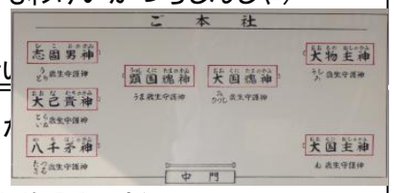
本宮
西本宮：**大己貴神（大国主神に同じ）**
東本宮：**大山咋神**
5摂社
牛尾宮：大山咋神 荒魂　　樹下宮：**鴨玉依姫命**
三宮宮：鴨玉依姫命 荒魂　宇佐宮：田心姫神
白山宮：菊理姫命　**白山比咩神社　祭神白山比咩大神**

貴船神社　起源　白鳳6年（666年）以前

本宮　**高龗神**　結社（中宮）　磐長姫命、縁結びの神
奥宮　以前の本宮。闇龗神（くらおかみのかみ）　高龗神と同神
本宮内末社　**白髭社 猿田彦命**　牛一社 木花開耶姫命
川尾社 罔象女命　鈴鹿社 大比古命　祖霊社 氏子の祖霊
奥宮内末社
吸葛社 味耜高彦根命　**日吉社 大山咋神**　鈴市社 五十鈴姫命
境外摂末社　楫取社 宇賀魂命　梅宮社 木花開耶姫命
白石社 下照姫命　私市社 大國主命　林田社 少名彦命
創建社伝　反正天皇時代。神武天皇の母である**玉依姫命**が、黄色い船に乗って淀川・鴨川・貴船川を遡って当地に上陸し、水神を祭った。伝承、大山祇命が、天孫瓊瓊杵尊に奉じたが、姉の**磐長姫命**は断られ、「縁結びの神として良縁を授けん」と当地に鎮まる。

賀茂別雷神社（かもわけいかづちじんじゃ）

上賀茂神社
賀茂別雷大神（かもわけ



賀茂御祖神社（

下鴨神社
東殿：**玉依姫命**（たまよりひめのみこと）
賀茂別雷命（上賀茂神社の祭神）の母
西殿：賀茂建角身命（かもたけつぬみのみこと）
玉依姫命の父

八坂神社　斉明天皇2年（656年）、高句麗から来日した調進副使・伊利之使主（いりしおみ）の創建　（社伝）

主祭神 中御座：**素戔嗚尊**（すさのおのみこと）
東御座：櫛稲田姫命（くし（い）なだひめのみこと）
素戔嗚尊の妻
西御座：八柱御子神（やはしらのみこがみ）-
素戔嗚尊の8人の子供（八島篠見神、五十猛神、大屋比売神、抓津比売神、大年神、宇迦之御魂神、大屋毘古神、須勢理毘売命）の総称
配神（東御座に同座）神大市比売命（かむおおいちひめ）、佐美良比売命 - いずれも素戔嗚尊の妻
（西御座に御座）稲田宮主須賀之八耳神
（いなだのみやぬしすがのやつみみのかみ）
明治の神仏判然令以前は、主祭神は以下の3柱。
中の座：牛頭天王（ごずてんのう）
東の座：八王子（はちおうじ）
西の座：頗梨采女（はりさいにょ・ばりうねめ）

伏見稲荷大社和銅年間（708 － 715年）（一説に和銅4年（711年）に、伊侶巨秦公（いろこのはたのきみ）

伊奈利山（稲荷山）の三つの峯に神を祀った
宇迦之御魂大神（うかのみたまのおおかみ）
配神 佐田彦大神（**猿田彦命**）　大宮能売大神
田中大神　四大神（しのおおかみ）

「野」　平安京創始、それからの歴史的意味とは

縄文
弥生
古墳
飛鳥
奈良
平安
鎌倉
室町
安土
江戸
近代

乙訓

雲宮（京都盆地最古稲作）
長法寺・神足・調子遺跡
銅鐸型土器
土師氏
綴喜 筒城宮
継体天皇 弟国宮　大和へ
羽束師神社
向日神社、乙訓寺
樫原廃寺
小塩山　勝持寺、金蔵寺
長岡京 短命遷都

念仏三昧院　光明寺
浄土宗　法然死後、迫害
法然遺骸流浪後、荼毘
（熊谷直実）

葛野

初見「日本書紀」
「日本書紀」に郡名初見

【 山岳地域 】
梅ヶ畑・弓削遺跡　銅鐸
【 低地・三角州 】
高燥・氾濫のため、居住少

新勢力　秦氏 の 進出

蜂岡寺、北野廃寺
松尾大社、木嶋神社

愛宕山　白雲寺、高雄山寺、月輪寺他

大原野　嵯峨野　北野　紫野
初見「三代実録」

化野　蓮台野

（嵯峨天皇）嵯峨離宮
「薬子の変」　皇子多く財政難
臣籍降下、源氏武家発祥 皇室弱体遠因

嵯峨野　蓮台野

大念仏狂言　千本閻魔堂
嵯峨清涼寺　壬生念仏
勧善懲悪 と 因果応報

禅宗　妙心寺、西芳寺
（足利）等持院、天龍寺
武家統率弱体　混乱期へ

（八条宮智仁親王）桂離宮
関白職解約、八条宮家を創設
細川幽斎から古今伝授、
甥の後水尾天皇に相伝

愛宕

北白川上終町 遺跡

鴨氏、小野氏、
出雲氏、粟田氏、八坂氏

上賀茂神社、下鴨神社
北白川廃寺、愛宕寺
出雲寺、法観寺

天皇　外戚・惑僧 の排除

鳥辺野

摂関（藤原道長）法成寺

上皇（白川天皇他）六勝寺

（白川、鳥羽、後白河上皇）
鳥羽離宮　栄華から衰退へ

武家　鎌倉幕府　六波羅探題
浄土宗　法然釈免　大谷入寂
禅宗　建仁寺、南禅寺、東福寺
大徳寺

室町幕府　花の御所
禅宗　相国寺
日蓮宗・町衆　台頭と弾圧、復活

武家
確立
（豊臣秀吉）聚楽第　御土井
（徳川家康）二条城

（御水尾上皇）修学院離宮
徳川対抗、上皇制度 復活

紀伊

秦氏
伏見稲荷大社
御香宮廃寺
柏原野

芦川野

芦川野

伏見城　豊臣衰退へ

宇治　相楽

宇治氏　狛氏

宇治　久世

山階廃寺　広野廃寺
橋寺
音羽山 法厳寺

栗前野

（藤荒頼道）
平等院
摂関政治
衰退へ

近代化 文明と教育 **岡崎・御所周辺**　（最近）大学「野」との進帰

所感

「愛宕」以外で、
かつ「野」の地域は
廃寺が多い

朝廷「禁野」
遊猟地
主に山麓地域

葬送地

「野」の地域は
ある勢力の衰退
新勢力への過渡期
に経由する場所

諸行無常と輪廻
時代の変遷には
不可欠な存在である。

「活性」と「安息」
「愛宕」と「葛野」など
「野」の場所は、
その様な関係である。

「野」の地域は　ある勢力の衰退、新勢力への過渡期に経由する場所。　諸行無常と輪廻。 時代の変遷には不可欠な存在である。
「活性」と「安息」　「愛宕」と「葛野など野」の場所とは、その様な関係である。

歌に詠まれた「野」から、「野」の心を感じる。　万葉集と古今和歌集から、判りやすい「(季節)の野」から始まる歌を、以下に抽出した。
結果、「秋の野」が最も多く詠まれていた。 その「秋の野」はともかく、「春や夏の野」までも、「うら悲し、なつかしみ、泣いている、苦しき」の気持ちを著している。「活性」の場から離れて、「安息」の場所で、ひと時を過ごしたに違いない。
以上、　「歴史の野」、「歌の野」を確認した。「野」は、人々の歴史において不可欠な「安息」の場所であり、「活性」のための「再生」の場所でもある。

万葉集　春

番号19/4290　原文　春野尓 霞多奈i伎 宇良悲 許能暮影尓 鶯奈久母　　訓読　春の野に 霞たなびき うら悲し この夕影に 鶯鳴くも
仮名　はるののに　かすみたなびき　うらがなし　このゆふかげに　うぐひすなくも　　天平勝宝5年2月23日 / 年紀 / 作者:大伴家持

番号　08/1424　原文　春野尓 須美礼採尓等 来師吾曽 野乎奈都可之美 一夜宿二来　　訓読　春の野に すみれ摘みにと 来し我れぞ 野をなつかしみ 一夜寝にける
仮名　はるののに　すみれつみにと　こしわれぞ　のをなつかしみ　ひとよねにける　　春雑歌 / 作者:山部赤人

古今和歌集　春

1033　春の野の　しげき草葉の　妻恋ひに　飛び立つきじの　ほろろとぞ鳴く　　平貞文
　春の野の生い茂った草のように、しきりにあなたを求めて、飛び立つ雉のように、私は「ほろろ」と泣いています、という歌。

万葉集　夏

番号08/1500　原文　夏野<之> 繁見丹開有 姫由理乃 不所知戀者 苦物曽　　訓読　夏の野の 茂みに咲ける 姫百合の 知らえぬ 恋は苦しきものぞ
仮名　なつののの しげみにさける ひめゆりの しらえぬこひは くるしきものぞ　　夏相聞 / 作者:坂上郎女

万葉集　秋

番号01/0007　原文　金野乃 美草苅葺 屋杼礼里之 兎道乃宮子能 借五百礒所念　　訓読　秋の野の み草刈り葺き　宿れりし　宇治の宮処の 仮廬し思ほゆ
仮名　あきのののの みくさかりふき やどれりし うぢのみやこの かりいほしおもほゆ　　雑歌 / 作者:**額田王 / 京都**
　天武天皇の妻として十市皇女の出生後、天武天皇の兄である中大兄皇子(天智天皇)に寵愛されたという話は根強いが確証はない。
状況証拠は『万葉集』に収められた歌のみである。 特に、以下の2首をめぐって、天智・天武両天皇との三角関係を想定する理解が一般にある永遠のロマンである。
　茜指す 紫野 行き 標野 行き 野守は見ずや 君が袖振る　(巻1・20・額田王)　紫の匂へる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも　(巻1・21・大海人皇子)

番号 08/1537　原文　秋野尓 咲有花乎 指折 可伎數者 七種花　　訓読　秋の野に 咲きたる花を 指折りかき数ふれば 七種の花
仮名　あきののに さきたるはなを およびをり かきかぞふれば ななくさのはな　　秋雑歌 / 作者:山上憶良

番号　08/1577　原文　秋野之 草花我末乎 押靡而 来之久毛知久 相流君可聞　　訓読　秋の野の 尾花が末を 押しなべて 来しくもしるく 逢へる君かも
仮名　あきのののの をばながうれを おしなべて こしくもしるく あへるきみかも　　天平十年戊寅秋八月廿日)　秋雑歌 / 作者:阿倍虫麻呂

古今和歌集　秋

201　秋の野に　道も惑ひぬ　松虫の　声する方に　宿やからまし　　読人知らず
　松虫・・・スズムシあるいはマツムシ
秋の野では草が茂り、帰る道もわからなくなってしまった、それならば人を「待つ」という松虫の声のする方角に行って一夜の宿でも借りようか、という歌。

225　秋の野に　置く白露は　玉なれや　つらぬきかくる　くもの糸すぢ　　文屋朝康は仮名序・真名序で取り上げられている文屋康秀の子
　つらぬきかくる・・・貫いて掛けている
秋の野に置く白露は珠であろうか、蜘蛛の糸がそれを貫いて掛けている、という歌。“つらぬきかくる” は、貫いて(草などの間を)渡している。 純粋、一途な思いになりたい心か？

243　秋の野の　草の袂か　花薄(すすき)　穂にいでてまねく　袖と見ゆらむ　　在原棟梁 ありはらのむねやな　898年(寛平 十)没　父　在原業平　ボッチャンの呑気な歌であろうか？
　「袂(たもと)」は本来「手本」あるいは「手元」で、肘から先の手の部分を指すが、ここでの "袖“ と “袂” は、ほとんど同じ部分のことを、言葉を変えて言っているだけで、物名の部で 424番の在原滋春が「拾はば袖に はかなからむや」と言ったのに対して、忠岑が 425番で「袂より はなれて玉を つつまめや」と返しているものと同じであると考えられる。
歌の意味は、秋の野の袂だろうか、花ススキは、その穂の身振りで私を招く袖のようだよ、ということ。恋歌仕立ての姿のよい歌である。